

《資料紹介》

校祖 渡邊辰五郎翁の書簡

林 宏 一

Letters of “Tatsugoro Watanabe”, the Founder of Tokyo Kasei University

Kōichi HAYASHI

はじめに

本学博物館には、校祖渡邊辰五郎翁自筆の書簡が4通所蔵されている。

1. 明治22年2月17日付 柴垣久道様宛 1通 封筒付き
2. 年月日不詳 宛先不明（改良服関係） 1通
3. 年月日不詳 登与子様宛 1通
4. 年不詳9月12日付 高井よう子様宛 1通

このうち4の高井よう子様宛1通は、すでに校祖生誕150年記念に際して刊行された冊子『女子教育の先駆者 渡辺辰五郎と今日の教育』（1994年 渡辺学園）の見返しに一部写真が紹介されており、御存じの方もおられると思われるが、他は久しく収蔵庫に保管されたままで、報告紹介される機会もないまま今日に至っていた。

筆者は、館長在職中より館職員の協力を得ながら少しずつこれらの書簡の解説を進めてきたところだが、なにぶん古文書解説には不慣れなうえに、辰五郎翁独特の癖字に悩まされ全文を読み解くのに時間がかかってしまった。最終的には、埼玉県立博物館（現歴史と民俗の博物館）時代の古文書に堪能な仲間の助力を得て、ようやく全容を明らかにすることができたので、ここに全文を紹介し、簡単な解説を加えて、今後の研究の参考に供することとしたい。

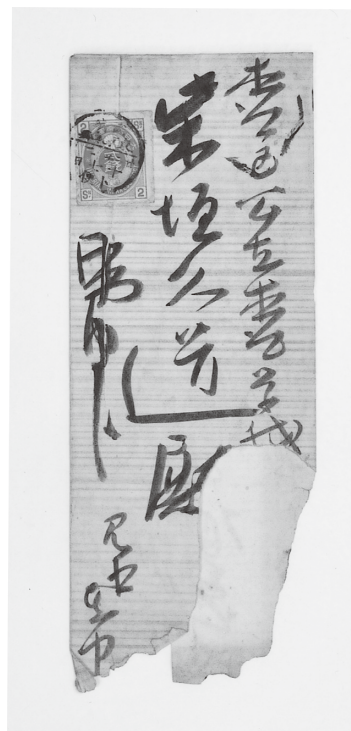
1. 明治22年2月17日付 柴垣久道様宛書簡

本状は封筒付きで、巻紙仕立て。巻頭部分を欠損する。渡邊滋寄贈。寄贈年月日不詳。

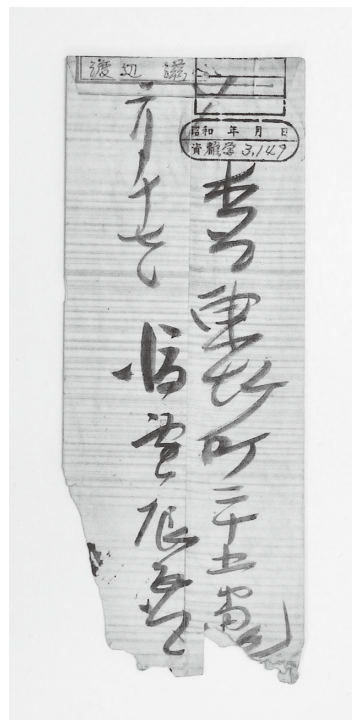
三紙紙継 一紙 縦16・4×横42・2cm 全長85・7cm 封筒 縦18・0×6・9cm（現状）

切手 菊小判貳銭（紅）

消印 丸一印（墨）「武蔵／東京本郷／廿二年二月／十七日／ト便」

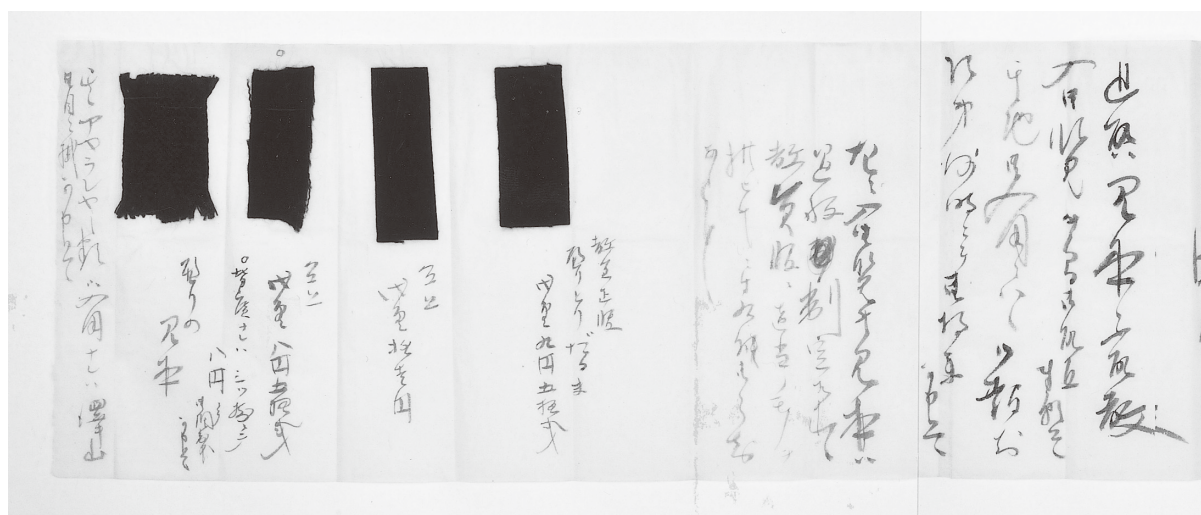


裏



表

柴垣久道宛書簡 封筒



1. 柴垣久道宛書簡

[封筒表書]

本郷区公立本郷学校 (以下欠損)

柴垣久道殿

席皮下

見本

在中

[封筒裏書]

本郷区東竹町二十五番地 (下部欠損)

メ

二月十七日

渡邊辰五郎

[本文]

(欠損) 調製之御

思召も御座候ハバ

御注文ヒ仰付ル様

相願度且又他分教

員ニテモ御調製之向

モ御座候ハバ代價之義ハ

一時拂ニても二三ヶ月

賦位ニテモ大兄之

御保証ヒ成下候方

へハ直ニ御調製可申上候

尚裁縫向ハ最念

入代價者精々相

[読み下し]

(欠損) 調製の御思召しも

御座候はば

御注文仰せ付けらるるよう

相願たく かつ又たぶん教員方にも

御調製の向きも

御座候はば 代価の儀は

一時払いにても 二、三ヶ月賦位ににても

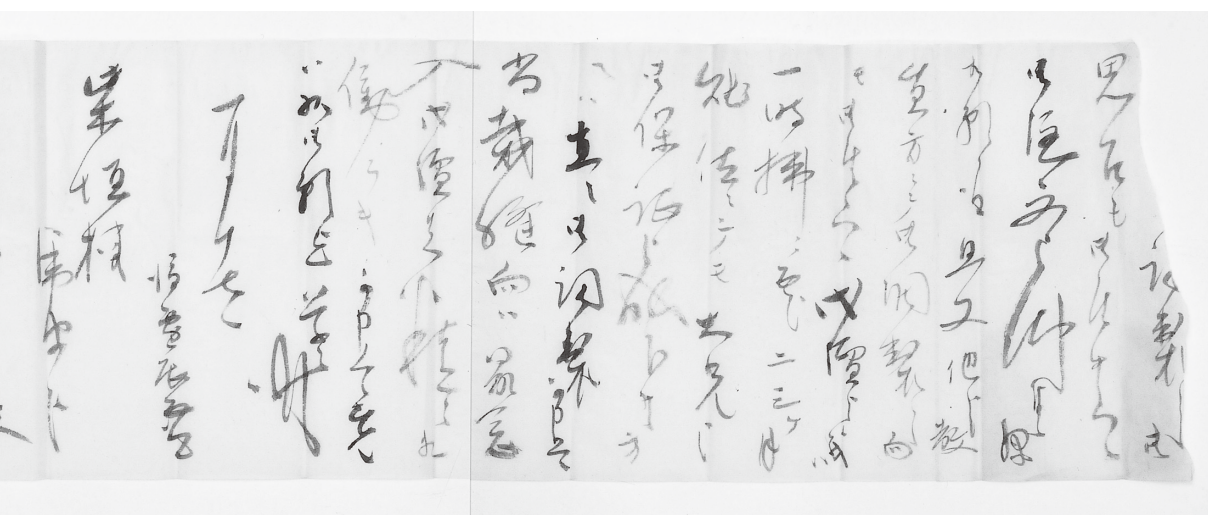
大兄の

御保証なし下され候方へは

直ちに御調製申し上ぐべく候

なお裁縫 (の) 向は最念入り

代価は精々相働き申し上ぐべく候



働ラキ可申上候先
ハ右御願迄 草々 頓首
一月十七日

渡邊辰五郎
柴垣様帟皮下

まずは右御願いまで 草々頓首

一月十七日

渡邊辰五郎
柴垣様虎皮下

※「虎皮下」 脇付けの一つ

追啓見本不取敢
入御覧候間御取立奉願候
其他御入用候ハバ御報知
次第何時ニテモ持参可申上候

追啓 見本取敢えず
御覧に入れ候間御取立願奉り候
その他御入用候はば御報知しだい
何時にても持参申し上げべく候

左ニ入御覧候見本ハ
過般制定相成候
教員服ニ適當ノモノヲ
撰ヒ候ニ付左様御了知
可下ル候

左に御覧入れ候見本は
過般制定相なり候
教員服に適當のものを
選び候につき左様御了知
下さるべく候

教員正服
(布見本) 遍りとり だるま
代金九円五拾錢

全上
(布見本) 代金拾壹円

全上
(布見本) 代金八円五拾錢
○背廣ナレハ三ツ揃ニテ
八円ヨリ

御調製

可申上候

遍りの
(布見本) 見本

其アカラシヤ之類御入用ナレハ澤山
御目ニ掛可申上候

それ赤羅紗の類御入用なれば沢山
お目にかけ申し上げべく候

〔解説〕本文及び追伸2節からなり、文頭数行分を欠損している。

文面から本郷区公立本郷学校柴垣久道宛ての、学生・教員制服注文問い合わせにかかわる書簡と判断され、文末には小短冊形に裁たれた布見本が4片添付され、代金等の添え書が記されている。

書簡本文の日付は1月17日とあるが、封筒裏書きの日付及び二銭切手上に押された消印日付から、発信年月日は明治22年（1889）2月17日であることは明らかであり、辰五郎翁の書き間違いと判断される。発信地は「本郷区東竹町二十五番地」、辰五郎翁は明治17年（1884）に和洋裁縫伝習所の校舎を本郷区湯島4丁目3番地から同区東竹町25・26番地に移転している。

官立の学生・教員の制服が公式に制定されるようになったのは、明治19年（1886）3月2日の「帝国大学令」、同4月10日「小学校令・中学校令・師範学校令」の公布に伴ってのこととみなされ、まず学生の制服、ついで教員の制服といった順序で実施定着していったようである。帝国大学では令発布の年に、第一高等学校では同20年5月に正科履修の生徒に着用の命が出て、22年に教員の制服制帽ができたことが知られている（『日本服制史』下 大田臨一郎 平成元年三月 文化出版局）。この前年明治21年（1888）9月に文部大臣森有礼が文部省訓令第二号で師範学校に対して「尋常師範学校職員ノ儀ハ殊ニ容儀ヲ正シ威重ヲ保タシムルコト職務上必要ニ付自今該学校長教育幹事舎監ハ執務上一定ノ服ヲ着用セシムヘシ」と制服着用の令を布達した。近代国家の建設を進める中で、教育現場においてもしかるべき体裁を整える必要を意識しての施策と推察される。

本書簡の追伸二節目に「・・・過般制定相成候教員服ニ・・・」の文言が見える。「過般」とあることから制服の制定から間もない時期であることを物語っており、明治21年（1888）9月の文部大臣森有礼の文部省訓令第二号を契機として次第に官立学校の生徒・教員の制服着用が普及していった状況を窺うことができる。

本郷区公立本郷学校及び柴垣久道の詳細については未詳。ただし柴垣久道は、明治39・40年（1906～7）に刊行された東京高等商業学校一橋会発行『一橋会雑誌』第21・22・28号の発行人・編集者として名を見せているので、後年東京高等商業学校に籍を移したことが知られる人物である。識者の御教示を俟ちたい。

2. 年月不詳 改良服関係書簡 資料三一五〇

巻紙仕立て。巻末部分を欠損。宛先、発信年月日も明らかでない。渡邊滋寄贈。寄贈年月日不詳。

二紙紙継 一紙 縦18・0×横（二紙目、現状）55.0cm 全長75・0cm

〔本文〕

御書面正ニ拝見仕御機嫌能く
御運動ヒ進候由国家之ため

〔読み下し〕

御書面正に拝見仕る 御機嫌よく
御運動進められ候由 国家のため

奉賀候改良服之着用ハ
下バキ之ハ女股引下袴ハ別紙
図之通り又下着ニハ通有之
ツツ袖の長着ヲ着用スルカ或ハ
ツツ袖之半胴ギニても宜敷候先ハ
第一ニ襦袢ヲ着シ次ニ胴着次ニ
上着次ニ袴ヲ着ルナリ

賀し奉り候 改良服の着用は
下ばき之は女股引 下袴は別紙
図の通り また下着には通有の
筒袖の長着を着用するか 或いは
筒袖の半胴着にても宜しき候 先ずは
第一に襦袢を着し 次に胴着 次に
上着 次に袴を着るなり

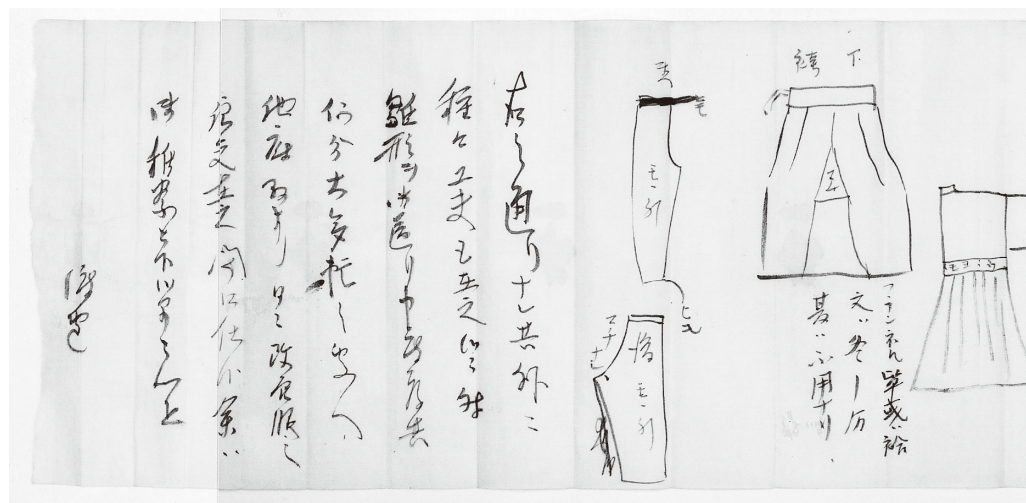
(図)

下	フランネル単或ハ裕	
マチ	之ハ冬ノ分	(省 略)
袴	夏ハ不用ナリ	

まへ ヒモ モモ引 ヒモ 後 モモ引
マチナシ

右之通りナレ共外ニ
種々工夫も在之候ニ付
雛形ヲ御送り申度存共
何分大多忙之處へ
他府縣より日々改良服之

右の通りなれども ほかに
種々工夫もこれあり候につき
雛形をお送り申したく存ぜども
何分大多忙のところへ
他府県より日々改良服の



2. 改良服関係書簡

注文在之閉口仕候余ハ
御推察ヒ下候 草々以上
渡邊

注文これあり閉口仕り候 余ハ
御推察下され候 草々以上
渡邊

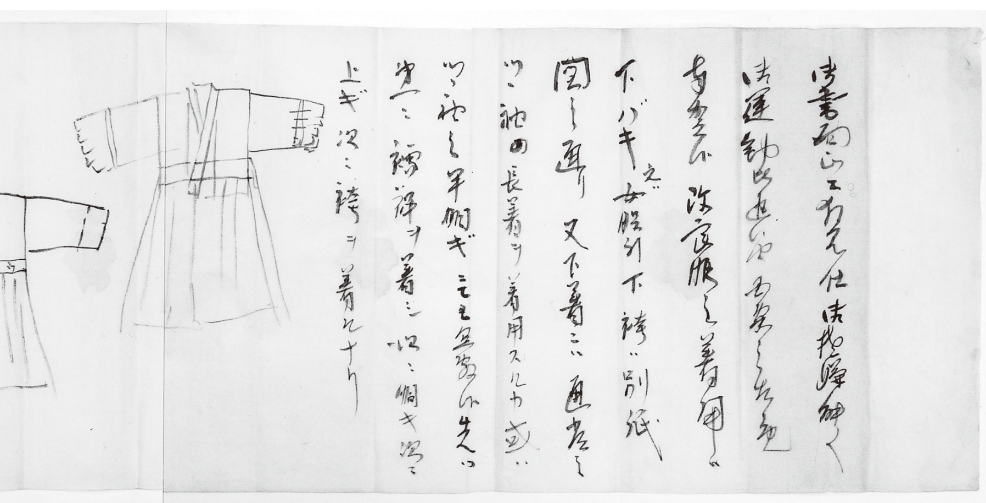
[解説] 全文完備し、本文中ほどに改良服の概略がスケッチされている。

次の3. 登与子様宛とともに改良服にかかわるもので、卒業生からの問い合わせに仔細に回答したものとなされる。

改良服の考案・製作・普及は辰五郎翁の業績の一つである。小森甚作編『渡邊辰五郎君追悼録』（私立東京裁縫女学校出版部発行 明治41年5月）の傳及び年譜よれば、翁は明治15年（1882）頃に考案を起し、20年頃には世上に広く話題となって同志の佐々木豊治、元田直、山田美妙等と会を組織し種々討議を加え、31年には『婦人改良服指南』を著すにいたった、と説いている。

辰五郎翁の改良服に関する歩みは、いまひとつ不明なところが多い。『追悼録』に言う明治15年頃の考案は、改良の対象やそれに関わる具体的な著述・試作品があるのかどうか、現在は確認できていない。夫馬佳代子編『衣服改良運動と服装改善運動』（家庭教育社 2007年2月）によれば、翁は明治15年に「改良服を考案する会」を設立し、同志を集めての「衣服改良会」の結成は19年であったことを明らかにしている（「郵便報知新聞」明治19年10月31日附け記事）。以後、翁は教育・医学界現場や婦人改良服の考案・製作・普及に力を注ぎ、明治31年（1898）4月に『婦人改良服指南』（東京裁縫学校発行）を、同36年3月には『婦人改良服裁縫指南』（東京裁縫女学校同窓会）を著わし、広く社会に理論と実践の指針を示し多くの成果をあげている。

本書簡は宛先、発信年月日ともに不明ながら、改良服の着用に対する問い合わせに懇切丁寧に答えていることから、卒業生への返信であることは明らかである。文中に見える「御運動進められ候由」とは、改良服普及に関わる運動と推察される。発信年については不明だが、「他府縣より日々



改良服の注文之在り」の文言から、改良服の製品化が進み、他府県からの問い合わせ・注文が増加した時期のものとみなされる。次の3. 登与子様宛書簡と併せ考えると、おおよその年が割り出せそうである。

3. 恩師の書簡（登与子様宛） 年月不詳

巻紙仕立て。巻末を欠損。発信年月日不明。渡邊滋寄贈。寄贈年月日不詳。これを収める封筒に「恩師之書簡」の表書がある。

二紙紙継 第一紙 縦18・0×横34・6cm 第二紙 横60・6cm 全長95・2cm

[本文]

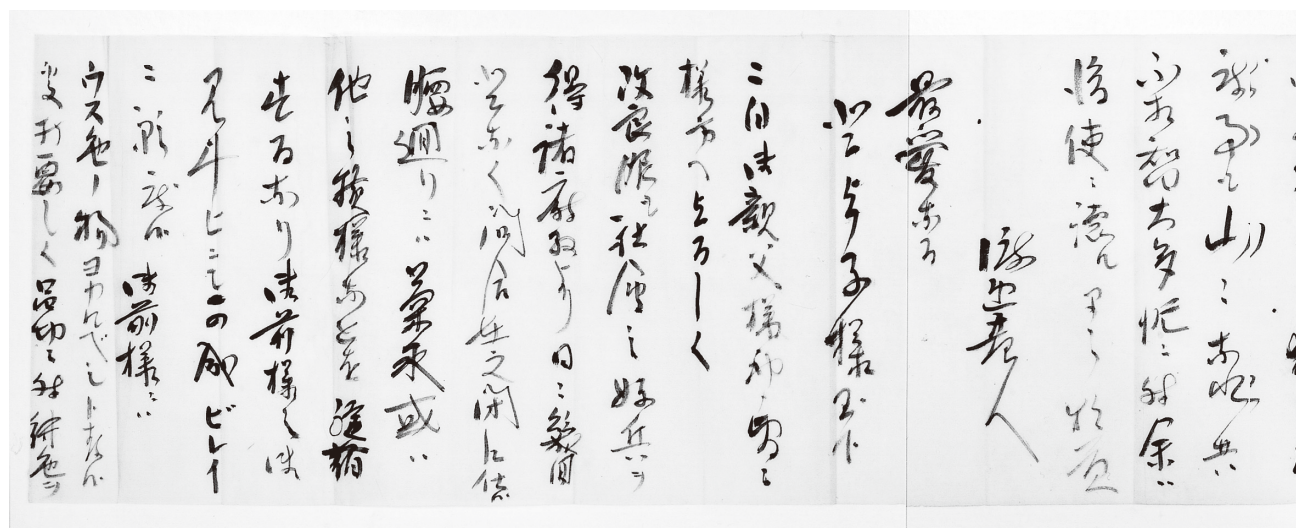
(「ヲ着用スルナ_カ」)

尊書正ニ拝讀仕候
然ハ_カ宅於ても皆々
様御壯健之由奉賀候
私方も幸ヒ一同無事
罷在ル間乍他事御休神
ヒ下度候金貳円正ニ
落手仕候改良服も出来
致居候ニ付近日御送り
可申上候袴之縫目云々
ハ御説之通りニて差支
御座なく候被布之豎

[読み下し]

(「ヲ着用スルナド」)

尊書正に拝読つかまつり候
然らば_カ宅においても皆々
様御壯健の由賀し奉り候
私方も幸い一同無事
罷り在る間、他事ながら御休心
下され度く候 金貳円正に
落手仕り候 改良服も出来
致し居り候に付き、近日御送り
申し上ぐべく候 袴の縫い目云々
御説の通りにて差支え
御座なく候 被布の豎



3. 登与子様宛書簡

衿なども単ハ豎の方へ
返シ衿ハ身頃の方へ返ス
何れも都合之善き様ニ
なせし物なれば左様
御承知ヒ下度候猶申上
度事も山々なれ共
不相替大多忙ニ付余ハ
後使ニ譲ル草々敬具

渡邊老人

最愛なる
登与子様玉下

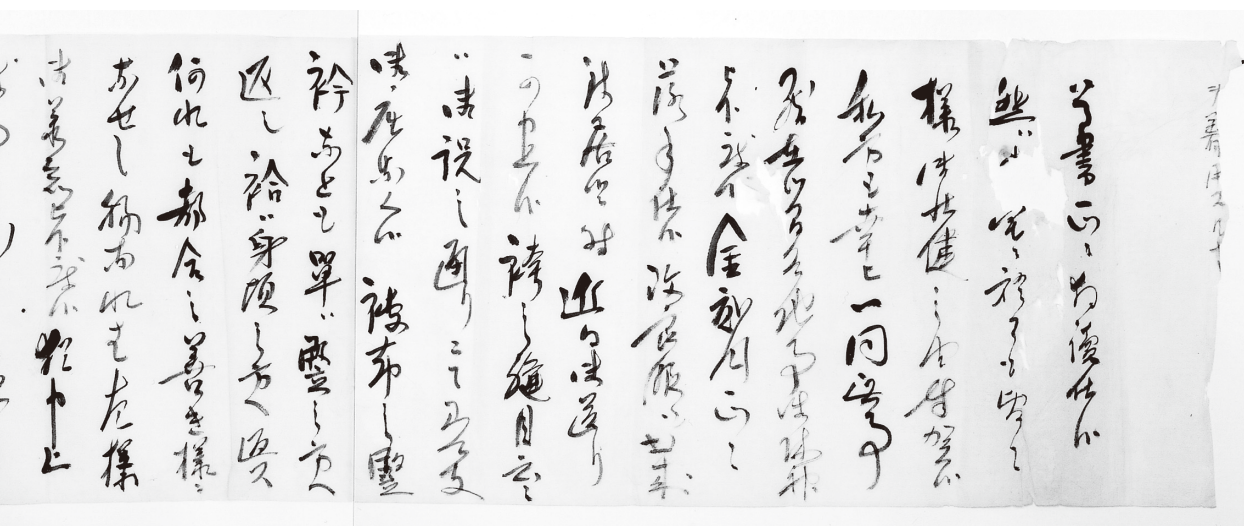
二白御親父様初メ皆々
様方へよろしく
改良服も社會之好兵ヲ
得諸府縣より日々幾回
登なく問合在之閉口仕候
腰廻りニハ菊水或ハ
他之模様などを縫著
寿るなり御前様之御
見斗ヒニて可成ビレイ
ニ願度候 御前様ニハ

襟なども単は豎の方へ
返し、衿は身頃の方へ返す
何れも都合の善きように
なせしものなれば、左様
御承知くだされ度く候
猶申し上げ度き事も山々なれども
相変わらず大多忙に付き、余は
後使に譲る 草々敬具

渡邊老人

最愛なる
登与子様玉下

二白（追伸）御親父様初め
皆々様方へよろしく
改良服も社会の好評を得
諸府県より日々幾回となく
問い合わせ之あり閉口仕り候
腰回りには菊水或いは
他の模様など縫著
するなり お前様の
お見計らいにて可なり
美麗に願いたく候 お前様には



ウス色ノ物ヨカルベシト存候
處折悪しく品切ニ付紺色ヲ
(以下欠損)

うす色の物よかるべしと存じ候ところ
折悪しく品切れに付き紺色を
(以下欠損)

〔解説〕 卷末を欠損するが、ほぼ全文の内容は読み取ることができる。2と同じく改良服の話題を主体に、袴の縫い目、被布の縫い方に関する質問への回答からなっている。宛先の登与子から改良服の注文があり、それが既に仕上がって送り届ける状況になっているところへ、改めて登与子から金二円の送金と袴・被布に関する質問の手紙があり、それに対する返信であることが分かる。金二円は、改良服の代金であろう。

長文の追伸後半「腰回り云々」以下は、内容から改良服に関わることとみなされ、袴の腰回りに装飾用に縫著する模様は「菊水」等が好ましい旨示唆している。「菊水」紋は、明治36年（1903）3月に出版された『婦人改良服裁縫指南』の見本着装図にも取りあげられており、日清戦争から日露戦争にいたる時期の、軍国主義著しい当時の世相を反映したものと思われる。「美麗に願いたく候」の文言から、仕上がりは実用的であることはもちろんのこと、美的にも優れているべきことに念を押しているところに、辰五郎翁の教育方針がよく現れている。

また、登与子用の改良服の布地について「お前様にはうす色のものよかるべしと存じ候」ところが、あいにくふさわしい布地が品切れであったので、やむなく紺色にした、とある。教え子の一人一人の風姿・性格をきっちと承知して、その人にふさわしい布地を選んでいる様子がみてとれ、辰五郎翁の学生に対する深い愛情の一端を窺い知ることができるのも、本書簡の特色であろう。

本文後付の「最愛なる登与子様」の表記、前文の「尊宅に於ても皆々様御壮健之由奉賀候」や追伸の「御親父様初メ皆々様方へよろしく」の文言からも覗えたとおり、登与子とは家族ぐるみの親交があったことが知られる。登与子の特定は卒業生名簿等を当たっても手掛かりがない。この頃の人名表記はかなりルーズであることからすると、「登与子」は「とよ子」、「とよ」、「トヨ」である可能性がある。その観点に立って改めて卒業生名簿や関連の史料を当たってみると、明治33年（1900）東京裁縫女学校高等科を卒業し、郷里の岐阜に帰り岐阜市柳ヶ瀬に岐阜裁縫伝習所を開いた「佐々木とよ」（明治6～昭和26・1873～1951）の名が挙がる。別に、前出の『追悼録』中「霊前への捧呈品」名簿「志のぶ会」会員氏名中に「小島とよ子」の名もあるが、文面の内容等から推して蓋然性の高いのは「佐々木とよ」であろう。

「佐々木とよ」については、岐阜県立図書館ホームページ《岐阜県ゆかりの先駆者たち 第26回「私立学校創設の先駆者 佐々木とよ（ささき とよ）」》に詳しい。それによれば、「とよ」は大垣藩の士族の家に生まれ、同地の興文第二高等小学校卒業後、地元の学者に歴史・数学等を学んで知識教養を深め、女性の自立を志して上京し、明治29年（1896）私立共立女子職業学校乙科刺繍科に入学、同31年卒業後、改めて辰五郎翁教鞭を執る東京裁縫女学校高等科に入学し、高い裁縫技術と近代的な教授方法を学んだ、とある。「とよ」の開いた岐阜裁縫伝習所は東京仕込みの合理的で質の高い教育内容が評判となり入学希望者が殺到し、同36年には市内西野町に移転拡張し佐々

木裁縫女学校と改称、その後同42年（1909）佐久間町に新築移転し、大正3年（1914）佐々木実科女学校と改称、同13年（1924）佐々木高等女学校を設置、同15年岐阜市鶯谷に移転、戦後鶯谷女子高等学校と改称し、今日鶯谷中学・高等学校としてその教育活動が続いている。

本書簡の宛先「登与子様」を「佐々木とよ」とするなら、発信の年は、彼女が東京裁縫女学校を卒業し、郷里岐阜で裁縫伝習所を開いた明治33年（1900）以降のことになる。前節でも紹介したとおり辰五郎翁が『婦人改良服指南』を著したのが明治31年、続いて『婦人改良服裁縫指南』を著したのが同36年であることからすると、この頃が辰五郎翁考案の婦人改良服の実用的完成期であり、普及期であったと推測される。事実、明治36年（1903）の『婦人改良服裁縫指南』には、東京裁縫女学校同窓会の名で次のような序文が記されている。以下、いささか長くなるがここにその要所を引用してみよう。

「・・・（前略）・・・多年考案ヲ盡サレ終ニ一個ノ新意匠ヲ立テラレタリ 凡テ美觀ヲ主トスルモノニ實際ノ應用ニ不便多ク又實際ノ應用ニ便利ナルモノハ概ネ美觀ヲ欠ク 是世間事物一般ノ情態ナリ 然レ共先生ノ新案ヲ見ルニ其從來ノ服装ノ不便ナル点ヲ去リテ而カモ外觀ノ美ヲ損セズ一個ノ改良服トシテ優ニ頭角ヲ表ハスモノナリ 此改良服意匠ノ發表セラレタル未ダ漸ク二年ニシテ今日既ニ之ヲ用フルモノ甚々少シトセズ ・・・（以下略）・・・」（傍点筆者）

辰五郎翁の婦人改良服が、他のそれに較べて一際優れていることを賞するとともに、改良服新意匠を發表してはまだ二年を経つに過ぎないのに、かなり世間に広く普及している、と述べている。この二年の経過の文言に着目するなら、本書が36年3月の刊行であることから新意匠の發表は明治34年であったことが明らかとなる。さらに本書簡に見える「改良服も社会の好評を得 諸府県より日々幾回となく問い合わせ之あり閉口仕まつり候」の文面からすると、新意匠發表後大きな反響を呼ぶ中で相応の時間が経過していることが窺え、それやこれやを勘案すると本書簡の発信年は明治34年から36年頃と判断される。これに拠るなら、前の2の書簡もほぼ同じ時期のものと考えて差し支えなからう。このことを補強するものとして、明治33・34年頃に東京裁縫女学校を卒業した生徒による「卒業生の声」の中に、改良服についての実際の見聞を語っているところがあり（三友晶子 『「卒業生の声」を聞くー「裁縫雛形」をもっと知るために』 本学博物館報No.54 2010年秋の号）、この頃が辰五郎翁の婦人改良服普及運動の興隆期であったことを裏付けている。

4. 9月12日付け 高井よう子様宛書簡

巻紙仕立て。卷子装。寄贈者、寄贈年月日不詳。

本紙一紙 縦18・0cm 全長106・8cm

[本文]

御問合せ之趣き了承

御返事左尔

女兒三才祝着本式

裁ちハ三っ身尔手も四っ身

[読み下し]

御問い合わせの趣了承

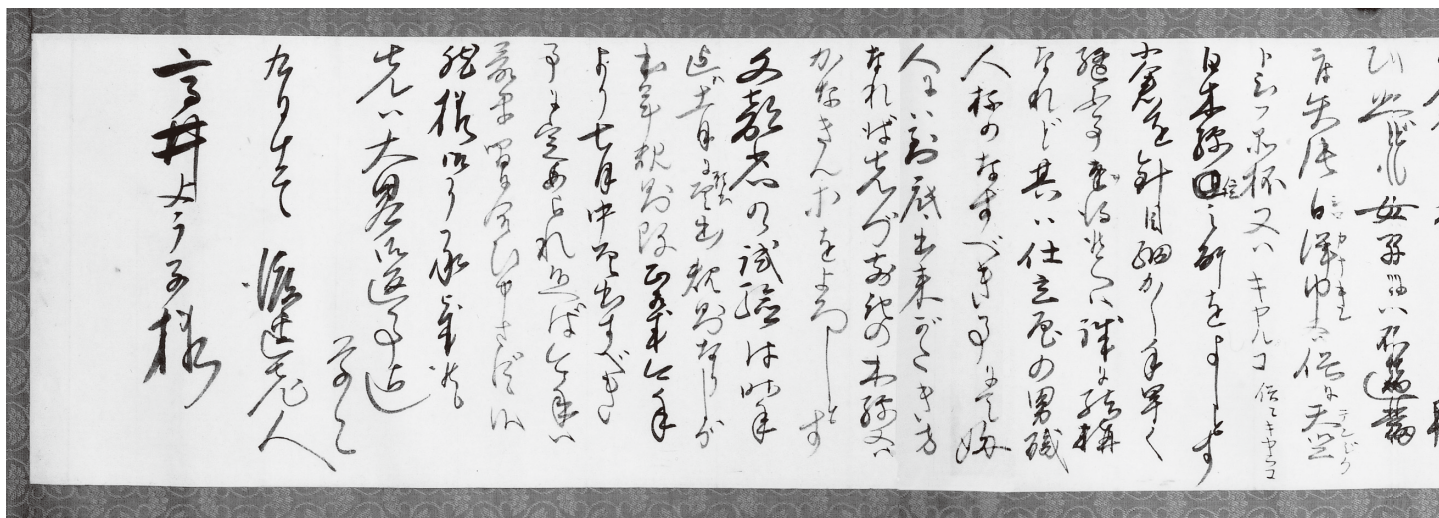
御返事左に

女兒三才祝着 本式

裁ちは三ツ身にても四ツ身

尔ても宜し
 切地ハ縮緬裾模様又ハ
 腰模様の紋付裏緋縮
 緬となし袖^ナ形りを丸く
 する事
 下着ハ赤の無垢二枚を重
 ね都合三枚重ルする事
 略式なれば
 ゆうぜん縮緬位^ナ尔て宜し
 紋付けざれば袖形りを
 角^ナ尔すべし
 下着ハ前同様無垢二枚
 之事又白二枚でもよし
 四寸内外
 帯ハ巾三寸^ナ尔三寸の一
 位の丸帯を用ゆ地ハ
 繻珍又ハ大和錦の類
 運針^ナ尔用ゆる材料
 或学校或教授所^ナ尔てハ
 小倉を最良として用
 ひ候ども女子^ナ尔ハ不適當
 二付矢張^{シロカナキン}白洋巾又ハ俗^{テンジク}尔天竺

にても宜し
 切れ地は縮緬裾模様または
 腰模様の紋付き 裏緋縮緬
 となし 袖^ナ形り丸く
 する事
 下着は赤の無垢二枚を重ね
 都合三枚重ねにする事
 略式なれば
 ゆうぜん（友禅）縮緬位^ナにても宜し
 紋付けざれば袖形りを
 角^ナにすべし
 下着は前同様無垢二枚
 の事 又白二枚でもよし
 四寸内外
 帯は巾三寸に三寸の一位（抹消線）
 の丸帯を用ゆ 地は
 繻珍又は大和錦の類
 運針に用ゆる材料
 或いは学校或いは教授所にては
 小倉を最良として用ひ候ども
 女子には不適當
 に付き やはり白洋布又は俗^{テンジク}に天竺



4. 高井よう子宛書簡

ト云フ品柄又ハキヤルコ 俗ニキヤラコ
白木綿位の所をよしとす
小倉を針目細かく手早く
縫ふ事ヲ得被候へハ誠尔結構
なれど其ハ仕立屋の男職
人様のなすべき事尔て婦
人尔ハ到底出来可多き方
なれば先づ前記の木綿又ハ
かなきん等をよろしとす
文部省の試験は昨年
までハ十一月尔願書提出規則なりしが
本年規則改正相成今年
より七月中提出すべき
事尔定められ候へば今年ハ
最早間尔合い申さ須候
然様御了承ヒ成爲し
先ハ御返事迄

草々

九月十二日 渡邊老人
高井よう子様

と云う品柄又はキヤルコ俗にキヤラコ
白木綿位の所をよしとす
小倉を針目細かく手早く
縫うことを得られ候へば誠に結構
なれど 其れは仕立屋の男職人様
のなすべき事にて 婦人
には到底出来がたき方
なれば 先づ前記の木綿又は
かなきん等をよろしとす
文部省の試験は昨年
までは十一月に願書提出規則なりしが
本年規則改正相成り 今年
より七月中提出すべき
事に定められ候へば 今年ハ
最早間に合い申さず候
然るよう御了承成られたし
先ずは御返事迄

草々

九月十二日 渡邊老人
高井よう子様

正に金世と成るる承
はさるるな
女房身祝書也
裁ちいふ身をも思
ふ
切地ハ綿糸裾折振云
腰折振の紋付表端
端と云 袖折を丸く
する
ト着衣の無垢二枚を重
ね着る様をさす
畧式なれば
ゆうぜん端折位云
紋付ければ袖折を
角もさす
ト着衣同様無垢二枚
云々 又二枚とも
常衣ハ巾着もさす
傳の丸帯を月也地ハ
端折又ハ表端の紋
付針もさす 材料
或は後或は後研
小倉をさす云々

〔解説〕首尾完備した長文の書簡で、高井よう子からの女兒三歳祝着本式の仕様及び生徒指導現場における運針用布地の選択、文部省の教員検定試験願書提出時期の確認等に関する質問への返信である。これまでの書簡からも窺われるとおり、実用に即した懇切丁寧な回答は誠意と愛情に満ちており、一人一人の卒業生と対等に向き合って指導交流する辰五翁の姿勢がよく示されている。

高井よう子は旧姓平野、名は「よう」といい、明治31年（1898）東京裁縫女学校本科を卒業し、郷里の名古屋に平野裁縫女学校を創立した人物である。9月12日の発信日のみで発信の年が記されていないが、本文後半の文部省試験願書提出時期に関して「本年規則改正相成り、今年より七月中に提出すべき事云々」の文面から、この年を特定することができる。手懸かりは既出の明治36年刊行の『婦人改良服裁縫指南』附録の「高等女学校 女子師範学校 裁縫家事教員試験問題集」にある。同附録の裁縫科文部省第十六回本試験の項をみると、前回まで年が明けた1月か2月に実施されていた本試験が、明治35年（1902）には10月に変更されている。本試験に対する予備試験も定例で行われていたようで、十五回までは毎年11月であったものが、十六回は8月に繰り上げられている。このことから知られるとおり、明治35年に教員検定試験の規則が改正され、本試験とそれに伴う願書提出の期日が早まり、従来11月であった願書提出締め切りは7月中提出締め切りとなったことが確認される。これによって、本書簡の発信年は明治35年であることが明らかとなる。

おわりに

以上、本学博物館が収蔵保管する校祖渡邊辰五郎翁の4通の書簡について、解説・読み下しを行い、若干の解説を附してみた。

発信時期からみると、1の明治22年柴垣久道宛が最も早い。2・3・4の書簡は東京裁縫女学校時代の教え子との卒業後の交流に伴う書簡で、概ね辰五郎翁晩年に近い明治35年から36年の頃に集中している。ことに卒業生との交信は、きめ細やかで愛情にあふれた内容であり、辰五郎翁の人物が偲ばれてこころ打たれるものがある。懇切丁寧、しかも要所は厳しく押さえた質問への回答は、和洋裁縫伝習所以来、いやさらに遡って生地千葉県長南の地で開いた裁縫塾以来の辰五郎翁の教育理念に裏打ちされたものといえることができる。

これらの書簡を詳細に検討分析することにより、辰五郎翁の教育活動の実際がより鮮明に解明されることを期待して、この小稿を終えることにする。

最後に、この稿をなすに当たって書簡の解説、資料や関連情報の探索・収集に、次の方々に大変お世話になった。お名前を列記して、心からのお礼を申し上げさせていただく。（敬称略 順不同）

元埼玉県立文書館副館長重田正男 埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸主幹兼子順

本学博物館鴻池由香里 同三友晶子 同高橋佐貴子